懐かしい夢を見た。

といっても、昔の事を夢に見た訳ではない。かつて自分がＭＢデバイス〈ビィエル〉と契約を行った際に共有した、〈ビィエル〉の過去。それを再び夢で見たのだ。

〈ビィエル〉が機獣だった頃。まだ人間が機獣を兵器として使い、戦争に明け暮れていた時代の記憶。所々ぼんやりとしている部分もあるが、普通は契約を行う〈想刻の間〉から通常空間に復帰した際に、ＭＢデバイスと共有した記憶のほとんどを忘れてしまう事を思えば、アイナはかなりの部分を記憶している部類に入る。

「……」

夢の途中で目覚めてしまったが、その方がよかっただろう。アイナはあの戦いの結末を知っている。〈ビィエル〉自身に後悔はないかもしれないが、傍観者としては何度も見たい内容ではない。

枕元に置かれた待機モードの〈ビィエル〉を視界に捉え、アイナは感傷的になっていた気持ちを切り替える。あれは〈ビィエル〉の過去であって、自分があれこれ考えるのはお門違いなのだと。

「それより――」

不機嫌そうな表情で、アイナは夢が中断された――つまり、途中で目が覚めてしまった元凶を見つめた。

紅いロングヘアの女性である。アイナは同じベッドに横たわり、まだ眠っている彼女に、抱き枕よろしく抱き締められていた。女性としては長身で、豊満な体型をしている。アイナはその開けた寝間着から零れそうな豊かな双丘に、やんわりと圧迫されて目を覚ましたのだ。

ふと自分の胸元を見る。

「……」

アイナ・ボーグマンは〈機獣少女〉だ。〈獅子王〉の二つ名で呼ばれるほどの実力者である。だが、その容姿は中学生に間違われるほど小柄で、身体の凹凸にも乏しい。

驚くべきは、アイナと同衾している娘が同い年という事だろう。個人差という言葉で片づけるには無理があるというか、残酷とも言える事実だ。

「……無駄に身体ばかり育って――」

安らかな寝顔を見せる友人に、沸々と理不尽な怒りがこみ上げてくる。

なので、アイナは理不尽に対して理不尽で対抗する事にした。

「起きろ、ルイゼ」

ルイゼと呼ばれた娘の腕を払って拘束を逃れると、アイナは顔に押し付けられていた彼

女のたわわな果実を軽く――叩いた。
するとルイゼの寝間着のボタンが更に外れ、開けていた部分がより開放的になり、豊かな二つの膨らみが大きく揺れた。
「……」
アイナは再び自分の胸元を見る。
揺れる以前の問題だ。
「――っ。いいかげんに起きんか、蜥蜴女ぁぁぁッ！」
まだ昼前の長閑な寝室に、持たざる者の怒号が響いた。

怒号という最悪のモーニングコールで、ルイゼ・ルンシュテッドは目を覚ました。如何に〈竜帝〉の二つ名で呼ばれる〈機獣少女〉であっても、睡眠は不可欠だ。
ルイゼが寝起きで重たい瞼を開くと、蒼いショートヘアの少女が不機嫌そうな顔で自分を見ている。
友人のアイナ・ボーグマンだ。
ようやく〈プレケース〉への対応が落ち着き、〈機獣少女〉の待機シフトから互いに外れた彼女を家に招いて、久々にプライベートを一緒に過ごしていた。昨夜、同じベッドで眠りに就くまでは不機嫌な様子はなかったはずだが。
「どうしたんですの、アイナ？　そんな怖い顔をして……？」
「……普段からこういう顔だ」
そう答えたアイナの口調は明らかに不貞腐れていた。確かに普段から愛想のない少女だが、それは真面目さの表れであって、けして仏頂面という訳ではない。むしろ、幼い容姿の彼女が大人びた表情をしているのは、差異があって微笑ましいくらいだ。
「あらあら。せっかくの可愛い顔が台無しですわ――子猫ちゃん」
同世代の女子と比べて、明らかに成長が早いルイゼにとって、アイナの小柄な容姿は嫌味ではなく純粋な憧れだった。それを気にしている節があるアイナには、皮肉と取られる事の方が多いが。
結局のところ、ないものねだりなのだ。
人は自分にないものを求めるし、隣の芝生は青く見える。
だが、それも悪い事ばかりではない。
正反対だからこそ、互いの良い部分に気付けるし、衝突がない。違うからこそ住み分けが出来ているというか、共通の何かを巡って争う事がないのだ。

周囲から見れば、二つ名を持つほどの〈機獣少女〉という以外は正反対のルイゼとアイナだが、それこそが二人の友情の秘訣なのかもしれない。少なくとも、ルイゼはそう考えている。

それ以上に、ルイゼはアイナが可愛くて仕方ないのだが、やはり一方的なだけの関係であれば、こうして長続きはしないだろう。

「……ふん。可愛いだけではな」

可愛いと言われ、満更でもなさそうに、しかし納得などしていないといった態度をするアイナ。

うん。やはり可愛い。

「それはそれとして――ワタクシ、どうしてこんなにはしたない恰好なのでしょう？」

胸元が涼しいと気付き見下ろせば、盛大に寝間着が開けていた。まるで情事の後のような乱れようだ。

「ひょっとしてアイナ、眠っているワタクシにムラムラして……」

「そんなはずあるか、この色ボケが！？」

顔を真っ赤にして否定する友人の初心さを、堪らなく愛おしいとルイゼは感じた。

「……」

ふと、先ほどまで見ていた夢の登場人物に自分達の姿が重なる。ＭＢデバイス〈ジービー〉との契約の際、ルイゼは〈ジービー〉が機獣だった頃の記憶を視た。それと同じ内容の夢に出てきた、自分と同じ名前の娘と、アイナと同じ名前の少女。理解しやすくするために、自分や近しい存在に置き換えただけの事であって、自分達とは無関係の出来事である事は判っている。あれは機獣達の過去の記憶なのだから。

だが、アイナと同じ名前の存在が、あのような結末を迎えるのは、やはり気持ちのいいものではない。ルイゼもまた、契約したＭＢデバイスと共有した過去を、かなり鮮明に覚えている。夢の結末を知っているのだ。むしろ、最後まで見届けずに目が覚めたのは僥倖だったかもしれない。結末を知っていて、どうする事も出来ない夢など、悪夢でしかないのだから。

――不意に着信を知らせる電子音が鳴った。

「ん？　お前もか」

「アイナも……？」

着信音はほぼ同時に二つ。ルイゼの〈ジービー〉と、アイナの〈ビィエル〉。ＭＢデバイ

スに届くという事は、〈機獣少女〉関連の連絡事項である可能性が高い。〈プレケース〉の脅威が一段落したばかりのタイミングなので嫌な予感がするが、出ない訳にもいかず、互いにベッドの反対側に足を下ろし、背を向け合った状態で着信に応じた。

連絡は二人とも、所属している〈機獣少女〉事務所から。どちらも〈戦姫（いくさひめ）〉――〈オフィス・タカマガハラ〉の機獣少女、カナコ・T・シングウジが至急連絡を取りたがっているという内容だった。

カナコとは顔見知りだが、特に親しい間柄という訳でもない。実際、こうして事務所を通さないと互いの直接の連絡先すら知らない。実力者同士といっても、そんなものだ。

「どうします？」

「応じよう。断る理由もないだろう」

久々に二人で過ごしているのだから――という不満を飲み込み、ルイゼはアイナに同意した。個人的な要件であれば理由を付けて応じない手もあるが、アイナの言う通り、カナコを嫌っている訳でもないため断る理由もない。むしろ、周囲に対して壁を作っている〈戦姫〉から連絡を取りたいと言われれば、内容が気になる。

二人はすぐに了承の旨（むね）を伝え、カナコと会う事にした。

その後、非番のはずだったルイゼとアイナはカナコの要請に応じ、封鎖区域〈エリアD〉に向かう事になる。互いに、久々に見る事になった愛機の記憶に想いを馳（は）せつつ、ほんの少しだけ感傷的な気分を抱えながら。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

閑話

『獣王 VS 魔装竜 VS 凶戦士（後編）』

（――夢だったのだろうか？）

通常空間に復帰したリッツ・ルンシュテッドは真っ先にその可能性を考えた。

〈想刻の間〉と呼ばれる仮想空間内で、ヒトの姿をした愛機と、〈ブレードライガー〉を自称する少女、そしてその搭乗者、更には〈デスステインガー〉の化身らしい存在と出会い、言葉を交わした。

あまりに不可思議な体験。

しかし夢と言うには現実味があり過ぎた。

だが、状況はリッツに思案する暇を与えなかった。

（考えるのは後だ。今は――）

巨大なウミサソリ型ゾイドと、蒼いライオン型ゾイドが戦っている。その奥にはゾイドの残骸が散乱する朽ち果てた遺跡が見える。

（あの現象が夢でないとしたら、とんでもない事になる）

〈デスステインガー〉の増殖による世界の破滅――最悪の可能性がリッツの脳裏を過ぎる。

戦況は一方的だった。ライオン型ゾイド――〈ブレードライガー〉が近距離からすべての火器を撃ち込むが、まるで効果がない。愛機である〈ジェノブレイカー〉のフリー・ラウンド・シールドでさえ悲鳴を上げる高密度ビームも、強固な装甲を持つウミサソリ型ゾイド――〈デスステインガー〉には歯が立たない。

あの装甲を撃ち抜くには、最大出力の荷電粒子砲しかないだろう。

リッツは〈ジェノブレイカー〉の脚部アンカーを下ろして機体を固定させると、即座にエネルギーのチャージにかかる。此方の意図に気付いた〈ブレードライガー〉が射線上から退避するのと同時に、リッツは操縦桿の引き金を引いた。

〈ジェノブレイカー〉の口腔内から露出した砲身。その先端から荷電粒子の眩い奔流が撃ち出され、〈デスステインガー〉を包み込んでいく。

「――やったはずだ！」

思わず口にした。そう自分に言い聞かせなければ、不安が取り除けなかった。

しかし――閃光の中で何かが動く気配がする。

「馬鹿な……！」

〈デスステインガー〉は健在だった。よくよく見れば、その全身に青白い光を纏っている――Eシールドだ。

「くっ！」

更にリッツは荷電粒子砲を撃ち続ける。

追加された荷電粒子コンバーターにより、三十パーセントの出力アップと連続発射が可

能になった荷電粒子砲を弾き返しながら、悠然と〈デススティンガー〉は向かって来る。
嘲笑（あざわら）うかのようにメイン・カメラを赤く光らせながら——
リッツは恐怖した。こんな化け物を倒せるはずがない。〈ジェノブレイカー〉と一体になれたと感じたのも間違いだったのだ。実際、彼は〈オーガノイド・システム〉の本質を理解出来（でき）ていなかった。ゾイドの心を捻（ね）じ曲げ、無理矢理に凶暴化させる事で戦闘能力を向上させる、悪魔のシステム。
（〈ブレードライガー〉のパイロットは気付いていた。なのに、俺は……）
愛機の気持ちにすら気付けない者に、ゾイド乗りの資格などない。テストする機体に対する理解が重要なテストパイロットであるリッツは、そういう思いが特に強かった。
だが——

——グゥォァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

萎（な）えかけた気力を取り戻させるように、荷電粒子砲は撃ち続けたまま、〈ジェノブレイカー〉が咆哮を上げた。
「……俺のためか？」
違う——と判った。
〈ジェノブレイカー〉は自分自身を奮い立たせるために吼（ほ）えたのだ。
「これは——」
リッツは愛機の感情が流れてくるのを感じた。
〈デススティンガー〉に対する恐怖——しかし、それ以上の敵意と憎悪。
「俺は……」
愛機の想いを感じたリッツは目の覚める思いだった。同時に、独り善（よ）がりだった自分を恥じた。〈ジェノブレイカー〉は彼に落胆などしていないし、〈デススティンガー〉に屈する気など更々（さらさら）ない。それなのに、リッツは勝手に自己嫌悪に陥（おちい）って、戦意を喪失していた。

——グゥルォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

〈ジェノブレイカー〉に同調するように、ライオン型ゾイド特有の咆哮がリッツの耳朶（じだ）を打つ。気付けば〈ブレードライガー〉が隣に並び、〈デススティンガー〉に向けて高密度ビームを撃ち込んでいた。

「一点突破しようというのか？」

いくら〈真オーガノイド〉とはいえ、搭載されたEシールド発生装置はヒトが造ったものだ。限界はある。

「……いいだろう！」

〈ブレードライガー〉のパイロットの意図を察したリッツは、荷電粒子砲を撃ち続けた。高密度ビームと荷電粒子砲。考え得る限り、このサイズのゾイドが搭載する装備としては最高クラスのエネルギーが一点に集中する。

やがてピシッと、〈デスティンガー〉のEシールド発生装置が限界を迎えて焼き切れした。Eシールドを失った装甲に大出力のエネルギーが直撃し、爆発が起こり、〈デスティンガー〉が爆炎に包まれていく。

「――今度こそやったはずだ！」

勝利を確信しての勝ち鬨だったが、リッツの期待は脆くも崩れ去った。

爆炎の中から姿を現した〈デスティンガー〉は頭部の装甲を失っていたが……

・・・・・・・・

それだけだった。

装甲に包まれていた『素体』と呼ばれる剥き出しの頭部を露出させ、カメラ・ガードの奥に隠されていた大小四つの複眼に、怒りの色が赤く灯った。

頭部装甲に隠されていた素顔が暴かれただけにも関わらず、その姿はまさに悪魔と呼ぶにふさわしい異形へと変貌していた。

「これが……〈真オーガノイド〉――」

リッツは恐れ慄くしかなかった。

変貌した〈凶戦士〉が迫る。

荷電粒子砲の連続発射の反動で一時機能を停止した〈ジェノブレイカー〉は、なす術もなく、無様に弾き飛ばされるしかなかった。機体は地面に叩きつけられ、左のカメラ・アイは砕け、リッツのパーソナル・マークである『R』のマーキングを施されたフリー・ラウンド・シールドも、支持腕の付け根からへし折れてしまう。

コクピットのリッツもまた、激しい衝撃に意識を失っていた。

●　●　●

何もない、ただひたすらに真っ黒い空間でリッツは、自分に背を向けて立っている女性の後姿を見ていた。

腰まで届く、緩く波打つ紅いロングヘアの娘だ。

何時(いつ)だったか、こんな背中を見た記憶がある。初めて憧れた大人の女性。

名前は確か――ルイゼだった。

リッツが小学校(エレメンタリー・スクール)に通っていた頃の新任の女性教師。当然のように、ただの生徒と教師の関係でしかなく、憧れだけで終わった初恋の記憶。

あの仮想空間で、娘の姿をした〈ジェノブレイカー〉の対人インターフェイスに『名前が欲しい』と言われた時、不思議と彼女の姿が浮かんだ。

あの時は咄嗟(とっさ)に、昔の飼い猫の名前だと言ってしまったが……。

「――アナタに出逢(であ)ってから時々、思う事があります」

リッツに背を向けたまま、独り言のように、ぽつりと紅(あか)い髪の娘は言った。

「ワタクシの存在が、アナタの在(あ)り方を歪(ゆが)めてしまったのではないかと――」

初めてゾイドに乗った時の事は、今でもはっきりと覚えている。一発で魅(み)せられた。すぐに最高のゾイド乗りになると誓った。

そして軍に入り、テストパイロットの道に進んだ。ヒトを殺す事も、戦争をする事も嫌だったからだ。

しかし、〈ジェノザウラー(ルイゼ)〉との出逢(であ)いがリッツを変えた。

他人(ひと)と争う苦々しさより、相手に勝つ喜びが大きくなった。

「ワタクシに搭載された〈オーガノイド・システム〉が、アナタを不幸にしてしまったのではないかと……そう考える事があります」

〈オーガノイド・システム〉はゾイド乗りの精神にも影響を与える。まだ〈ジェノブレイカー〉へと強化される前――リッツは初めて〈ジェノザウラー(ルイゼ)〉に搭乗した際、その強力な闘争本能に思いきり引きずられてしまった。〈アイスマン〉と呼ばれた冷静さなど、微塵(みじん)も残ってはいなかった。

だが、それは本当に〈オーガノイド・システム〉だけのせいだったか？

敵に勝つ喜び。それは自分自身のものではなかったのか？

「……そうか。俺は〈オーガノイド・システム〉を、戦いの言い訳にしていただけなんだな」

自嘲気味に零したリッツに、背を向けていた娘がゆっくりと振り返った。
切れ長の桃色の瞳。妖艶さと高貴さを併せ持つ、どこか肉食獣を思わせる美貌。女性としては長身で豊満な体形を包む、ガイロス帝国の軍服のような衣装。
仮想空間内における対人インターフェイスとも呼べる、〈ジェノブレイカー〉がヒトの姿を採ったもの。
リッツがルイゼと名付けた娘だ。
「確かにお前と出逢ってから、俺は変わった。だが、俺は後悔なんてしていない」
ゾイドは好きだが戦争は嫌でテストパイロットになったリッツが、自ら兵士として戦場に出た。それは誰に強制された訳でもなく、自分の意思だ。
「そして俺には、〈オーガノイド・システム〉を受け入れる素養があった。だからこれまで一緒に戦ってこられたんじゃないのか？」
「その通りです。アナタには〈オーガノイド・システム〉に呑まれず、制御出来るだけの素養があった。それは適正と言ってもいいものです」
「だが……〈オーガノイド・システム〉の本質には気付いていなかった」
「……そうです。しかし〈ブレードライガー〉のマスターは気付いていた」
「俺が奴に勝てなかったのは、その差か？」
「ええ。アナタの操縦は完璧でした。ですが、アナタはワタクシの想いまでは理解しきれていませんでした」
悲しみを誤魔化すようにルイゼは苦笑を浮かべて言ったが、その気遣いにリッツの胸はちくりと痛んだ。
「しかし〈ブレードライガー〉のマスターは、その想いまで理解していた。だから人機一体となり、性能以上の力を発揮出来た。正直、ワタクシは〈ブレードライガー〉が羨ましかった――」
躊躇いがちに〈ジェノブレイカー〉の化身の娘は告白した。その姿に初恋の女性の面影が重なり、リッツの胸を締め付ける。
「……すまなかった。俺は独り善がりだったんだな。お前は心を捻じ曲げられてまで戦ってくれていたのに、そんな事にすら気付いてやれなかった」
リッツは自分の不甲斐なさを呪った。〈ジェノブレイカー〉を完璧に乗りこなせていると勘違いしていた自分が恥ずかしかった。
しかし――
「顔を上げてくださいな」
「え……」

慈しむような声と、左の頬に添えられた柔らかな肌の感触。
「アナタは今、本当のゾイド乗りとなったのです。ワタクシが真に認めたマスターに」
ルイゼの言葉に、はっとしてリッツは訊ねた。
「……俺でいいというのか？」
「アナタがいいんです」
そう言って此方を見つめるルイゼの顔には、満面の笑みが浮かんでいた。それはリッツがかつて想いを寄せた女性の笑顔そのもので――
「そうか……」
それだけでリッツは救われたような気がした。
「――外の状況はどうなっている？」
気持ちを切り替えるように、努めてクールに振るまう。これで愛機に対する謝罪が終わったとは思わない。だが、まずは終わらせなければならない事がある。現実空間で猛威を振るっているであろう〈デススティンガー〉だ。
「〈ブレードライガー〉が戦っていますが、戦況は芳しくありません」
それはそうだろう。二対一でも圧倒されていたのだ。
「戻ろう。奴を倒すのが、お前の目的なのだろう？」
すべての〈オーガノイド・システム〉搭載ゾイドが、自らに積まれたシステムを憎んでいる。システムの大元たる〈真オーガノイド〉である〈デススティンガー〉の事を。
〈ジェノブレイカー〉も、あの〈ブレードライガー〉だってそうだろう。
「――ふふ。そうですわね。でも、少し違います」
もったいつけるように、茶目っ気たっぷりに、
「ワタクシ達の――ですわ」
と、冗談っぽくルイゼは訂正した。
「……そうだな」
こういう茶目っ気は初恋の女性教師にはなかった。やはり目の前の娘は、彼女とは別人なのだ。そんな当たり前の事に内心で苦笑する。
「マスター……？」
リッツの苦笑の理由が判らず、きょとんとする愛機の表情が可笑しかったが、あまり和んでもいられない。
「まずは〈デススティンガー〉を止める。それから〈ブレードライガー〉とも決着をつける――付き合ってくれるか？」
「無論です。アナタはワタクシのマスターで、ワタクシはアナタのゾイドなのですから」

きょとんとした表情から一転、ルイゼは優雅に微笑みながら答えた。それがとても心強い。

「なんとしても〈デススティンガー〉を止める。行くぞ――ルイゼ」

「イエス――マイ・マスター」

●
●
●

行動を停止した〈ジェノブレイカー〉から目を逸らすため、アーサー・ボーグマンは愛機を〈デススティンガー〉に向けて走らせた。

新たに追加された強化パーツ――『アタック・ブースター』を装備した機体は、便宜上〈ブレードライガーＡＢ〉と呼称される。複合兵装である一対のユニットにより、加速性能と砲撃能力は強化されたが、それでも〈ブレードライガー〉の本領は近接戦闘でこそ発揮される。

両サイドにレーザー・ブレードを展開し、すべての推進システムを作動させる。時速三百キロメートルを越えるスピードで〈デススティンガー〉に肉薄する様子は、蒼い弾丸そのものである。一撃を加えても深追いはせず、距離を取ってはまた突撃する一撃離脱を繰り返す。

しかし、その悉くを〈デススティンガー〉は腕部のハサミで弾き返す。巨体からは想像もつかない反射速度と、四対の節足による超信地旋回による迎撃。

幾度となく攻撃は防がれる。だが、アーサーはそれでも攻撃を繰り返した。

時間稼ぎだ――〈ジェノブレイカー〉が復帰するまでの。

しかし、すでに十回を越える超高速による突撃で、アーサーの体力は限界に近づいていた。高速戦闘による身体への負担は、徐々に集中力も鈍らせていく。

相手の動きが鈍るのを待っていたかのように〈デススティンガー〉が反撃に転じる。荷電粒子砲を除く全兵装を斉射し、〈ブレードライガー〉の退路を断つと同時に――その巨体が跳ねた。

「――な……ッ!?」

〈デススティンガー〉が跳躍し、〈ブレードライガー〉の眼前に着地。その信じられない挙動に、さすがのアーサーも言葉を失う。更に、駄目押しのような光景が老兵を襲う。

ハサミを備えた〈デススティンガー〉の二本の腕が――伸びた。

アーサーは咄嗟に愛機を右に跳ばし避けるが、伸びた腕の有効範囲からは逃げきれなかった。左のレーザー・ブレードの基部を掴まれ、吊るされるように〈ブレードライガー〉

の機体が持ち上げられる。ジタバタと蹠（もが）くが、地に足がつかず、飛び道具も使い果たした状態では、文字通り手も足も出ない。

宙吊りにされ、打つ手のない〈ブレードライガー〉を、〈デスティンガー〉は嬲（なぶ）るように痛めつけていく。空（あ）いている左腕を伸長させ、反撃の届かない距離から、全身をくまなく殴りつける。

「――――」

アーサーはただ耐える。全身を打たれる痛みに、無言で耐え続ける。実際に打たれている〈ブレードライガー〉が悲鳴も上げずに耐えているのだ。愛機との精神リンクによって発生するフィードバック程度の痛みなど、気にしていられない。

――ギィィィ……キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

そうして耐え続ける相手に焦（じ）れたのか、〈デスティンガー〉は咆哮を上げると、尾までを伸長させ、先端に装備された荷電粒子砲の砲身（バレル）で、〈ブレードライガー〉の腹部を串刺（くしざ）しにした。

その衝撃で掴まれていたレーザー・ブレードは基部からへし折れ、数メートルの距離を飛ばされた〈ブレードライガー〉は、更に地面を力なく転がされた。

けたたましくコクピットに鳴り響く警告音を無視し、アーサーは確かめるように愛機の状態を感じた。

損傷状況を確かめるまでもない。致命傷だ。人間にとっての心臓以上の意味を持つ、金属生命体の中枢（コア）――ゾイドコアをやられたのだから。

間もなく〈ブレードライガー〉は――死ぬ。

「……」

だが、それでも――

――グゥルルル……グゥルォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

〈獣王〉は立ち上がった。

自分を鼓舞するように咆哮を上げた。

「そうだ、まだ……まだ終わりじゃない！」

ここで自分達が負ければ、〈デスティンガー〉の言い分を認める事になる。

ヒトとゾイドの関係を否定する事になる。

それはゾイド乗りであり続けた自分をも否定する事だ。

それだけは認められない。認めたくない。

アーサーは額からの流血を右手で拭った。左腕は折れてしまったのか、感覚はなく、動かす事も出来ない。失血のせいか、視界も霞んで見える。

それでも右腕だけで操縦桿を握り、『動け』と命じる。

ゾイドの操縦における操縦桿やフット・ペダルなどの類は、ヒトがゾイドへ命令を送るための仲介装置でしかない。極論すれば、精神リンクだけで――『思う』だけでゾイドの操縦は可能なのだ。

愛機と心を通わせる事が出来るアーサーは、これまでも当たり前にそうしてきた。

霞む目を閉じ、視覚を〈ブレードライガー〉と同調させる。

途端に視界が閃光に包まれた。〈デスティンガー〉の荷電粒子砲の一閃。

止めをさすつもりだったのだろう。

だが、直前で〈ブレードライガー〉の展開したEシールドがそれを受け止めた。

荷電粒子砲の照射は続く。

だが、避ける訳にはいかない。すぐ後ろに、未だ停止したままの〈ジェノブレイカー〉が擱座している。

（あと何秒もつ……？）

〈ブレードライガー〉は、すでに限界だ。機体も、エネルギーも――搭乗者も。

（よお、若いの……お寝んねするにはまだ早いだろう――？）

アーサーは息子を気遣う父親のように、意識だけを背後に向けた。

〈ジェノブレイカー〉の目に光が灯ったのは、それとほぼ同時だった。

●
●
●

眩い光が世界を覆っている。

荷電粒子とEシールドのエネルギーが衝突し、光と熱を拡散させているのだと、リッツは即座に理解した。

自分達を護るように立ちふさがっている〈ブレードライガー〉の腹部からは、血を想起させる液体燃料と、骨を思わせる構造材が覗いている。

一目で判る――もう長くはないだろう。

「俺達を護ってくれていたのか……？」

リッツは内心で礼を言い、〈ジェノブレイカー〉をなんとか立ち上がらせる。〈ブレード

ライガー〉ほどではないが、此方の損傷も激しい。

すると、〈ジェノブレイカー〉の再起動に気付いたらしい〈ブレードライガー〉が、わずかに首を振り、身振りで何かを伝えようとしていた。

「まだ何かやろうというのか？」

〈ブレードライガー〉のパイロットは、この期に及んでも諦めていないらしい。

「いいだろう――」

その意図を酌んだリッツは、愛機を頷かせて返答とした。

〈ジェノブレイカー〉が右へ跳ぶと同時に、〈ブレードライガー〉はEシールドを解除して左へ跳んだ。

『阿吽の呼吸』とでもいうのか、示し合わせたように二機のタイミングが合った。

どちらから潰すべきか――一瞬だが、迷うような挙動を見せた〈デスティンガー〉だが、すぐに狙いは決まった。まずは損傷の激しい〈ブレードライガー〉から。

複数を相手にする場合、狙いやすいものから排除する。戦術の基本だ。もっとも〈デスティンガー〉にそんな思考回路があるのかどうかはリッツには判らなかったが。

「そう易々と――！」

荷電粒子砲はまだ使えない。脚部のウェポン・バインダーからありったけのショック・ガンとミサイルを撃ち放し、わずかでも〈デスティンガー〉の注意を〈ジェノブレイカー〉に向けさせる。

〈デスティンガー〉の荷電粒子砲が閃き、全弾撃ち尽くしたと同時に切り離ししたウェポン・バインダーが消滅したのが見えた。

鳥肌が立つ。荷電粒子砲を向けられる恐怖を初めて実感した。

悔しいが認めるしかない。技術や経験だけではない、度胸でも〈ブレードライガー〉のパイロットに負けている自分を。

「――だとしても！」

尚更、こんな所で死ねない。

最高のゾイド乗りになるためには生きなくてはならない。

リッツは更に愛機を加速させる。

追撃をかけようとしていた〈デスティンガー〉を、次は高密度ビームが襲った。右側だけになってしまった、本来は左右一対の複合兵装による〈ブレードライガー〉の攻撃だ。

とはいえ、すでにエネルギーが尽きかけていたのか、装甲表面を軽く焦がす程度の威力しかなかった。

〈ジェノブレイカー〉とは逆方向から迫る〈ブレードライガー〉に、〈デスティンガー〉

は忌々しげに対応する。

「な……!?」

常識を疑う光景に、リッツはもう何度目か判らない衝撃を受けた。〈デススティンガー〉の背部の装甲が裂け、隙間からシャワーのように迎撃レーザーが射出されたのだ。

〈真オーガノイド〉の自己進化の発現――それは自己修復・自己増殖に並ぶ〈デススティンガー〉の能力だ。

Eシールドはもう使えないのだろう。無数に降りしきるレーザーのシャワーを、〈ブレードライガー〉は最小限の動きで、致命傷となる被弾だけを避ける。それでも、〈獣王〉の機体は少しずつ削られていく。

「速く……速く――ッ!」

〈ブレードライガー〉の援護に回りたい衝動を必死で抑えつけ、全速で愛機を進ませる。

そして、ようやく目標地点に辿り着くと、リッツは目的のものを〈ジェノブレイカー〉に掴ませると、機体を反転させ〈デススティンガー〉に向けて突進した。

ここまでは〈ブレードライガー〉のパイロットの思惑通り――のはずだ。

準備が整った事を伝えるため、リッツはようやく使用可能になった荷電粒子砲を撃つ。

〈ジェノブレイカー〉の出力であれば、ホバー走行のままでも一応は可能とされているが、やはり安定はしない。軽々と〈デススティンガー〉には避けられてしまったが、注意を引ければ充分だった。

――グゥルルル…………グゥルォオオオンッ!!

〈デススティンガー〉に先行していた満身創痍の〈ブレードライガー〉が、最期の力を振り絞るように吠えた。今は味方であるはずのリッツが息を飲むほどの、危機迫る〈獣王〉の雄叫びが戦場に木霊する。

次の瞬間、残った背部右側の追加パーツを展開し、温存していたであろう推進剤で機体を無理矢理、押し出した。加速とほぼ同時に推進剤を使い切った追加パーツを切り離し、同じく右側だけ残ったレーザー・ブレードを展開する。どこにそんな力が残っていたのか、〈ブレードライガー〉は一瞬で〈デススティンガー〉の懐に跳び込むと、一振りになってしまった得物で相手の左腕を斬り飛ばし、残った右腕に牙で食らいつき、その動きを封じて見せた。

『手負いの獣』――執念とも呼べる〈ブレードライガー〉の猛攻に、そんな表現がリッツ

の脳裏に浮かんだ。

　しかし、それも一瞬。

「…………ッ!?」

　次の瞬間、〈ブレードライガー〉の機体は、〈デススティンガー〉のほぼゼロ距離からの雨のような迎撃レーザーで砕け散っていた。

（死んだ――のか？　あのパイロットが……）

　認めたくない光景に、リッツの思考は必死で理解する事を拒（こば）もうとする。〈ブレードライガー〉のパイロットが死ぬはずがない。まだ自分との決着がついていないのだ。それなのに、勝ち逃げなど、認めたくは――

「うぁああッ!?」

　リッツは悲鳴にも似た叫びを上げた。そうでもしないと気が狂いそうだった。

〈ブレードライガー〉と、そのパイロットが稼いだ一瞬――この一瞬の機会（チャンス）を活かせなければ、彼等の犠牲が無駄になる。

　爆発的な加速で超近距離（クロス・レンジ）に入り込んだ〈ジェノブレイカー〉は、〈魔装竜〉と呼ばれる所以（ゆえん）でもある右のフリー・ラウンド・シールドに内蔵された一対の特殊チタン合金の刃（エクスブレイカー）で、迫ってきた〈デススティンガー〉の尾を受け止めた。左のそれは失ってしまっているため、右腕のハサミは脚で強引に抑えつける。左腕を斬り飛ばしてくれた〈ブレードライガー〉のパイロットに内心で感謝を送り、リッツは切り札を使う。

〈ジェノブレイカー〉の左腕には回収した切り札――〈ブレードライガー〉から託されたレーザー・ブレードが握られていた。恐らくは〈デススティンガー〉と孤軍奮闘していた際に失ったのだろう。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――ッ!?」

　リッツの叫びに応えるように、〈ジェノブレイカー〉は渾身（こんしん）の力で、レーザー・ブレードを〈デススティンガー〉の剥（む）き出しの頭部に突き立てた。

――ギィィィシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?

　断末魔の叫びを上げながら悶絶する〈デススティンガー〉。

〈ジェノブレイカー〉は更にレーザー・ブレードを縦に引き、その頭部を斬り裂いた。

もはや抵抗力を失っていた尾をエクスブレイカーで両断し、迎撃レーザーの射出口が覗く背部の裂け目に　爪（キラー・クロー）　を捻（ね）じ込み、装甲を力任せに剥（は）ぎ取り、露（あらわ）になった素体部分にレーザー・ブレードを突き立てた。執拗（しつよう）なまでに、何度も何度も――

その行為は、超硬度のレーザー・ブレードが砕け、〈デスティンガー〉が完全に沈黙するまで――リッツの理性が戻るまで続いた。

力を失い、くず折れた〈デスティンガー〉からは目を離さずに、呼吸を落ち着かせようとリッツは深呼吸をした。もう死んでいる。これ以上なく殺した。それでも、まだ動き出すのではないかという不安が消えない。初めて刃物でヒトを殺した殺人者は、そういう恐怖に駆られて、何度も繰り返し刃物を死体に突き立てるのだという。

「――はぁっ、はぁ……はぁ……」

やがて、パイロットが落ち着いたのを見計らい、〈ジェノブレイカー〉は促（うなが）すように低く吠（ほ）えた。

「……判っている。後始末だろう」

荷電粒子砲の状態を確認し、発射体勢に移行する。目標は朽（く）ち果てた古代遺跡――そこに蠢（うごめ）く〈デスティンガー〉の幼体群。

今のうちに殲滅（せんめつ）しなければ、この星は彼等で溢（あふ）れる。

だが、リッツは思う。彼等に何の罪がある？

生まれたばかりの赤ん坊と同じだ。まだ何もしてはいない。

まだ罪は犯していない。

そもそも、彼等の罪とは何だ？

彼等にも生きる権利がある。それを自分達に都合が悪いからと奪っていいのか？

――『おれ達も生きなきゃならん』

仮想空間で聞いた〈ブレードライガー〉のパイロットの言葉が脳裏を過（よ）ぎる。

ここで撃たねば彼等の死が無駄になる。

だから――

「――お前達は……いてはいけないんだ！」

自らを奮い立たせるようにリッツは叫び――引き金（トリガー）を引いた。

荷電粒子の奔流（ほんりゅう）が遺跡を――〈凶戦士〉の子供達を包み込んでいく。

大量の悲鳴と怨嗟（えんさ）の叫びが響き渡るのを、リッツは聞いた気がした。

吐き気がする。命を奪う事を嫌っていた自分が、無抵抗な、何百何千という生命を葬り

去っている事実に。

（許せとは言わん……）

口には出さなかった。しょせんは自分を慰めるための、独善的な自己満足に過ぎないのだから。

朽ち果てた古代遺跡が業火に包まれ、夜明け前の空を赤く染めていた。

●
●
●

〈クレイジー・アーサー〉。

その渾名は敬意であると共に、侮蔑を意味するものでもあった。本来なら将軍の地位を得ていてもおかしくない経歴を持ちながら、昇進を拒み続けた彼に対する。

ゾイド乗りであり続けるためには止むを得なかった。

それが経験を積んだ年長者にとって、ある種の責任放棄である事も自覚していた。

それでもゾイド乗りであり続けたのはアーサーのわがままだった。

だから、未来ある若者の礎になれたのが嬉しかった。

ゾイド乗りとして出来る事があったのが誇らしかった。

自己満足かもしれない。決着をつけられず、勝手に後を任せた事を〈ジェノブレイカー〉のパイロットは恨んでいるかもしれない。

だが、それでもアーサーは満ち足りた気持ちだった。

「――我が主よ」

物静かな、だが凛とした声がアーサーを呼んだ。

ゆっくりと瞼を開くと、一見、少年のようにも見える中性的な容貌の少女が、すぐ傍に立っていた。短めに切り揃えられた蒼い髪と、意志の強そうな黄色の瞳。大人びた雰囲気と、小柄で幼い外見の差異が印象的だ。

「……よお、アイナ。戦いはどうなった？」

質問というよりは確認するような口調で、アーサーは蒼い髪の少女に訊ねた。

「〈ジェノブレイカー〉とその主が、やってくれました」

アーサーの問いに答え、アイナと呼ばれた少女は微笑を浮かべた。彼女が愛機である〈ブレードライガー〉の化身――この仮想空間内における対人インターフェイスだとは、誰も思うまい。

「そうか。なら思い残す事はもうないな……お前さんを巻き込んだのは、すまないと思ってる」

「とんでもありません！」

「……」

意外だった。この幼い見た目に反して大人びた少女が、慌てた様子で声を荒げた事が。

「……し、失礼しました」

アイナは気を取り直すように一呼吸置き。

「戦場で命を燃やし、その結果の死であるなら、それは我々にとっての本懐です。最後に貴方が見せた〈デスステインガー〉に対する猛攻……心が震えました」

無我夢中だった。何も考えていなかった。ただ、一矢報いたかった。

あの動きは、そんなアーサーの想いに、〈ブレードライガー〉が応えてくれた結果だ。

そう伝えても――

「だとしても、私だけでは不可能でした」

そう言って〈ブレードライガー〉の化身の少女は、あれはアーサーの手腕だと譲らない。

「貴方は最高のゾイド乗りです。少なくとも――私にとっては」

まるで父親の活躍を称賛する娘のような様子のアイナだったが、急にはっとなり、もじもじと俯いた。自分の発言に恥ずかしくなったのかもしれない。

「ありがとうよ」

アーサーは愛機の賛辞を素直に受け取る事にした。結果論だが、世界を救ったのだ。そのくらいの報酬はあっても罰は当たるまい。

「あ……はい――」

礼を言われた少女は、戸惑いにも似た、どこか困ったような表情を浮かべていた。

不意に――仮想空間が不安定に揺らいだ。

「……間もなく此処も閉鎖されます」

それはアイナの――〈ブレードライガー〉の死が近い事を語っていた。

同時に――アーサーの死も。

アイナの表情を見れば、なんとなく判る。アーサーの肉体は、すでに生物学的には死んだも同然の状態で、魂のみを〈想刻の間〉と呼ばれるこの仮想空間に避難させた。そんなところだろう。

「何か……望む事はありますか？」

もう充分だ。先ほどアイナが言った事は、そのままアーサーにも当てはまる。

最高のゾイドに出逢えた。全力で命を燃やし尽くせた。

ゾイド乗りとして、これ以上、何を望む事があるだろう。

思い残す事などないのだ……ゾイド乗りとしては。

「……家族がいた」

アーサーはぽつりと口にした。

「妻と娘だ。開戦の前に別れて、今は東方大陸にいるはずだ」

アイナは黙って聞いた。

「俺が仕事に――ゾイドにばかりかまけていたら、愛想を尽かされてな」

自嘲気味にアーサーは笑った。

家庭を蔑ろにしていた訳ではない。だが、彼の気持ちは常にゾイドに向いていた。近しいが故に、家族はそれを敏感に感じていただろう。

「別れたのは、娘が十五歳になった時だ。戦争が始まれば、真っ先に死ぬのがゾイド乗りだ。死ぬつもりはなかったが、待つ方は辛かったんだろうな……いや、責任転嫁か」

アーサーは独白を続けた。

「俺はヒトを愛せなかった……ゾイド以上には愛せなかった。ゾイドに乗らない自分が想像出来なかった。ゾイド乗りでなくなったら、俺には何も残らないような気がした」

老兵は続ける。心の内を懺悔するように。

『アイナ』は娘の名前だ……未練だな。今になって家族の事を思い出すなんぞ、勝手にもほどがある――」

目の前にいる少女と、名前の元になった娘に共通点は少ない。せいぜい見た目の年齢くらいだ。十五になっても、小柄で、幼さも抜けきれていなかった。今頃は、少しは成長しているだろうか。

「……私には――」

わずかな沈黙を破ったのは相対する〈ブレードライガー〉の化身の少女だった。

「私には家族や父親という概念は判りません」

ゾイドに家族という概念は存在しない。当然、親や子という関係も。

「ですが……貴方が父親であったのなら、その者は幸せだったと思います」

沈黙を嫌うかのように少女は続ける。

「少なくとも、私にとって貴方が最高の主であった事実に変わりはありません」

どうすれば自分の意思が伝わるだろうか。判らないからこそ、言葉を尽くして伝えようとしてくれている。

「私は貴方に出逢えて――幸せでした」

アーサーは言葉に詰まり、何も言えなくなってしまった。

はっとなり、アイナはまたアーサーから視線を逸らす。

「……私見です。忘れてください」

顔を赤らめて俯く少女に、アーサーは娘の面影を見た気がした。それは初めてこの少女に出逢った時にも感じた。だから、感傷だと判っていながら、少女に娘の名前を付けた。

「……？」

無言で頭部に置かれた手の感触に気付き、アイナが俯けていた顔を上げる。アーサーの行為の意味が判らず、きょとんとした表情を浮かべていたが、それが愛情を示す行為だと理解したのか、照れくさそうに微笑を浮かべた。

静寂はどれくらい続いただろうか。ほんの数分か、一時間か。この何もない空間では、体感時間がまるで当てにならない。

「歳かな、少し疲れた」

「お休みください。私はお傍にいます」

アーサーはゆっくりと息を吐くと、静かに瞼を閉じた。それだけで身体の感覚が消え、眠りに落ちていくような心地良さを覚える。

「おやすみなさい。良い夢を……我が最高の主よ――」

「ありがとう。俺にとっても、お前さんは最高の相棒だったよ――アイナ」

●　●　●

〈デスティンガー〉と死闘を繰り広げた戦場跡に、勝利者である〈ジェノブレイカー〉だけが立つ。左のカメラ・アイは割れ、パーソナル・マークがペイントされた左のフリー・ラウンド・シールドは失われ、全身が傷と汚れだらけの満身創痍である。

足元では搭乗者であるリッツが、大量に散乱する残骸を眺めていた。

〈ブレードライガー〉の機体は砕け、搭乗者の遺体も発見出来なかった。

「……」

今なら判る。自分は彼に魅せられたのだ。

それを認めたくなくて勝つ事にこだわった。〈オーガノイド・システム〉に、〈ジェノブレイカー〉の闘争本能に身を任せたのだ。

どんな人物だったのだろう。

あの不可思議な空間で彼と出会い、言葉を交わしたはずなのに、顔も名前も思い出せない。

しかし、握手をした手の感触だけは確かに憶えている。あれは夢ではなかったはずだ。

（俺も彼のようなゾイド乗りになれるだろうか――）

夜が明けていく。

その朝焼けよりも更に眩（まばゆ）い光が、西の空を赤く染め上げていく。遅れて轟音が空気を震わせた。共和国軍が、西方大陸における帝国軍の最後の砦――ニクシー基地の砲撃に成功したのだろう。

〈リック共和国軍が投入した〈ウルトラザウルス〉と、それに積まれた決戦兵器『ウルトラ・キャノン』。共和国軍の防衛線を突破し、それを破壊するのがリッツの任務だった。

しかし、彼は任務を果たせなかった。結果的に〈ブレードライガー〉と共闘し、〈デスティンガー〉の脅威を打ち破ったが、代わりに多くの仲間を救えなかった。ガイロス帝国は西方大陸戦争に敗れたのだ。今更（いまさら）、軍には戻れない。

「俺はどうすればいい……？」

リッツは愛機を見上げるが、〈ジェノブレイカー〉は答えてくれない。

しかし彼には判っていた。自分が何をすべきか。

この戦いで〈ジェノブレイカー〉の――いや、〈オーガノイド・システム〉に狂わされたゾイドの悲しみを知ったのだ。ならば、やるべき事は決まっている。

「――〈オーガノイド・システム計画〉を止める」

〈オーガノイド・システム〉の苦しみから、愛機を含むすべてのゾイドを救うために。

〈ブレードライガー〉のパイロットも、それを望んでいる気がした。

「行こう――〈ルイゼ〉！」

その声に応えるように〈ジェノブレイカー〉――〈ルイゼ〉は咆哮を上げた。

その後、リッツ・ルンシュテッドの消息は公式には確認されていない。

帝国軍の記録には、『作戦行動中行方不明（MIA）』とあるだけである。

なお、〈デスティンガー〉の追跡調査をしていた部隊の報告では、残骸が確認された古代遺跡付近にて、彼が建てたであろう墓標の存在も報告されている。

『私の知りうるかぎり最高のゾイド乗りここに眠る。その勇気、その決断力、その魂は、帝国・共和国の壁を越え、すべてのゾイド乗りの指針となるべきものである』

墓標にはそう刻まれていたが、それが誰を指しているのかは不明のままだったという。

ＥＮＤ

それは夢を見ていた。

封じられ、拘束され、夢を見るくらいしかする事がなかった。

（……）

今日の夢は懐かしい気持ちになる内容だった。

そんな記憶などないはずなのに、過去に自分が体験した事のように錯覚する夢。

ひょっとしたら、忘れてしまっているだけで、あの夢は実際にあった出来事なのだろうか？

もしくは、前世や別の世界の自分の記憶が、何かのきっかけで流れ込んだのか？

馬鹿馬鹿しい――とは思わなかった。

時間だけは無限にあるのだ。少しでも無聊の慰めになるなら、あらゆる可能性を挙げて、一つ一つ潰していくのもいい。

退屈よりは余程マシだ。

なんとなくだが、前世ではなく、別の世界の自分の記憶のような気がする。

であれば、自分の配役は何だろう？　人間ではないと思う。

そうなると、蒼いライオン型か、紅いティラノサウルス型か、もしくは――両方と戦っていたウミサソリ型か。

きっとウミサソリ型だ。そんな気がする。

（悔しい……）

何が悔しいのだろう？

負けた事か。

それとも、存在を否定された事か。

（……）

判らない。

だが、自分は確かに悔しいと感じている。

どうすれば、この悔しさは消せるのだろう。

どうすればいいだろう。

それは考え続けた。

時間だけは無限にあるのだから――

Fine…?

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとお）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』閑話――後編をお届け致します。

前後編をまとめて読んでくださった方、おつかれさまでした。当初は一つにまとめる事も考えたんですが、ページ数がかなり増えたので無理でした。やはり昔のバージョンは描写不足が多々ありました……反省。

『ゾイやみ』と関連付けるための新規パートについては、どうするか悩みましたが、第二十四話の直前という設定にしました。『獣王ＶＳ魔装竜ＶＳ凶戦士』では仲が悪いですが、『ゾイやみ』では仲良しです。特にルイゼからアイナに対するラブが強いです。キマシ！

本編終了後のエピローグ部分についての解釈は、お読みくださった方の解釈に任せます。まあ、もちろんアレなんですが……。

ちなみに、『ゾイやみ』の次回更新は……ひょっとしたら来月かもしれません。

ごめん、やみ子！　今回の加筆修正が本当に大変だったのよ……ッ！？

ペース配分が下手な創造主で正直すまんかった……！

２０１７／８／30　流遠亜沙

※今回はこの下に特別ページがありますので、このままスクロールして続きをご覧ください。

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る

アイナ＆ルイゼ　イラスト特別掲載

イラストは同人誌『獣王ＶＳ魔装竜ＶＳ凶戦士』に収録したもので、澤木沙樹さんに描いていただいたものを、ご本人の許可を戴き掲載させていただきました。

アイナは可愛く、ルイゼは美しく、期待以上のものを描いていただきました。改めて、ありがとうございました。今見ても素晴らしいです……。

「肯定です。我が主よ」

アイナ

ルイゼ

「イエスーーマイ・マスター」

澤木沙樹さんの Twitter はこちら